Research Monograph Series

即興の生成論
生成学における即、興、座、型、力、現実接地

A Generative Theory of Sokkyo: Soku, Kyo, Za, Kata, Force, and Reality Grounding in Generative Studies

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

A Generative Theory of Sokkyo:
Soku, Kyo, Za, Kata, Force, and Reality Grounding in Generative Studies

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文は、「即興」を無準備な表現、内面的自発性、偶発的な思いつきとしてではなく、型、座、身体、現実、抵抗、偶然性および力の関係から生じる存在生成として再定義する。そのために、即興を構成する「即」と「興」を生成学および生成の位相存在論の内部で再構成し、先行論考で提示された座、位、現実接地、力、人間以前性、自己以前性、自己証明、作品性および無名性との体系的関係を明らかにする。

本論文において、即は、差異を消去せず、異質な位相を差異のまま生成的に接続する構造である。「座」とは、型、参与規則、複数の位および継承可能性を保持する構造化された空位である。「興」とは、身体化された型が座において現実と接触し、その抵抗によって生じた不一致から、偶然性が方向を持つ力として立ち上がる局面である。

したがって即興とは、身体化された型が座において「即」という生成的接続構造を通じて現実へ接触し、その抵抗から生じた偶然性が興として立ち上がり、形と位として一時的に納まりながら、主体、型および座を再帰的に変形する出来事である。即興は型の欠如ではない。型が現実との接触を通じて、自己の既定性を越える生成である。

本論文はさらに、古典詩学における「興」、連歌の座、音楽的即興、グラフィティ、スケートボーディング、盆栽、Web Installationおよび人工知能を比較し、即興が個人の自由な自己表現ではなく、人間と自己以外との関係から生じる中動態的かつ無名的な生成であることを論証する。芸術家は興そのものを製造するのではない。芸術家が設計できるのは、興が生じうる座とインターフェイスである。

キーワード

即興、興、即、座、型、力、現実接地、偶然性、インターフェイス、自己以前性、作品性、無名性、生成学

目次

Contents

第0章 方法論的序論.....1
第1章 即興概念の問題.....3
第2章 興の意味構造.....4
第3章 生成学における即、座、興.....6
第4章 型と即興.....8
第5章 即興の生成過程.....9
第6章 時間、未来、力.....10
第7章 人間以前性、自己以前性、自己証明.....11
第8章 現象学、中動態、非共現性.....12
第9章 座、作品性、無名性.....13
第10章 芸術実践における即興.....14
第11章 逆問題芸術と即興.....16
第12章 人工知能と即興.....17
第13章 即興の倫理と政治.....19
第14章 基本命題.....20
結論.....22
参考文献.....23
方法論的声明.....25

第0章　方法論的序論

0.1　研究目的

即興は一般に、事前の準備なしに、その場で表現または判断を行うこととして理解される。この理解では、即興は計画、構成、規則および反復に対立する。即興する者は、蓄積された型から自由になり、内面から直接表現すると考えられやすい。

しかし、音楽、演劇、舞踊、会話などの即興研究は、即興が技能、慣習、身体的訓練、他者との対話および状況的制約から切り離せないことを示してきた。即興を完全な無規則性と同一視する理解は、現代美学においてすでに批判されている（Alperson 1984; Sawyer 2000; Benson 2003）。

それでも、即興はしばしば、個人の自発性と外部の規則との対立として説明される。本論文は、この対立を生成学の立場から転回する。問題は、主体が規則に従うか、規則から自由になるかではない。主体、規則、行為および作品が、一つの関係的出来事のなかからいかに同時生成するかである。

0.2　研究方法

本論文は、語源によって哲学体系を直接導出するものではない。「即」「興」「座」という漢字を分解する作業は、歴史的な語源説明ではなく、生成学上の構造的再構成である。

研究方法は、次の四つからなる。

第一に、「興」の字義および古典詩学上の用法を確認する。

第二に、現代の即興美学が示してきた身体性、技能、対話性および状況性を整理する。

第三に、それらを生成学の既存概念である即、座、型、力、現実接地、偶然性およびインターフェイスへ接続する。

第四に、美学者母の芸術実践を、生成学上の即興の具体例として分析する。

0.3　生成学における位置

生成学は、存在を固定的な実体としてではなく、自己、他者、自然、身体、制度、技術および時間の関係から生成する位相として研究する学である。生成の位相存在論は、その存在生成を記述する基礎理論として位置づけられる。

本論文は、生成学の既存系列である「印から型へ、型から形へ、形から座へ、座から位へ、位から無名性へ、無名性から文化生成へ」という構造を変更するものではない。

興は、この系列に新しい固定段階として追加されるものではない。興とは、既成の型と形が座のなかで現実へ接触し、次の形と位を生成する際に生じる力動的局面である。

第1章　即興概念の問題

1.1　無準備という誤解

即興が事前準備の欠如であるならば、訓練を受けていない者ほど純粋に即興できることになる。しかし実際には、音楽家、俳優、ダンサー、連歌師、グラフィティライターおよびスケーターの即興は、長期間の反復と身体的訓練を前提としている。

即興者は、何も持たずに現在へ立つのではない。過去の経験、技術、型、失敗、他者の表現、素材の特性および場所の記憶を身体に保持している。

したがって即興を特徴づけるのは、準備の不在ではない。準備されたものが、現在の現実によって予想外に使い直されることである。

1.2　自由という誤解

即興は自由と結びつけられる。しかし即興における自由は、制約が存在しない状態ではない。時間、素材、身体能力、場の規則、他者の行為および歴史的背景は、即興を強く制約する。

むしろ即興は、制約の内部に、それまで存在しなかった接続可能性を生じさせる。これは『力の生成論』における偶然性の定義と一致する。偶然性とは、既存の選択肢から任意の一つを選ぶことではなく、それまで選択肢として存在しなかった関係が生成されることである。

即興の自由は、制約からの離脱ではない。制約の接続構造を変形する能力である。

1.3　自発性という誤解

即興を内面からあふれ出す自発性として理解すると、生成の起源は個人の内部へ回収される。しかし即興で生じる行為は、本人の内面だけから説明できない。

演奏者は他の演奏者の音に応答する。グラフィティライターは壁面、距離、塗料、時間制限および周囲の動きに応答する。スケーターは路面、傾斜、速度、重力、道具および失敗可能性に応答する。盆栽の制作者は樹木の成長、枝の抵抗、季節および枯死可能性に応答する。

即興は内面の外部化ではなく、内面と外部という区別そのものが組み替えられる出来事である。

第2章　興の意味構造

2.1　興ることと興すこと

「興」には、「おこる」「さかんになる」「おこす」「はじまる」「ふるいたつ」という意味がある。また「キョウ」と読む場合には、楽しみ、おもしろみ、感興などを意味する（漢字ペディア「興」）。

ここには重要な二重性がある。

一方では、興は自然に「興る」。他方では、人は何かを「興す」。興は主体によって完全に作られるものではないが、主体の行為と無関係に発生するものでもない。

即興者は、興を直接所有または支配できない。しかし、型を身体化し、座を形成し、他者と接触し、素材の抵抗を受け入れることによって、興が生じる条件を整えることができる。

2.2　古典詩学における興

「興」は『詩経』以来、賦、比と並ぶ詩的構成の方法として論じられてきた。朱熹は興を、まず別の物事や眼前の景を語り、そこから詠むべき言葉を引き起こす方法として説明した（中国文化研究院「詩経」）。

ここで重要なのは、詩的言語が完成した内面の直接表現として始まらないことである。鳥、植物、風景、季節または物の動きが先に現れ、それへの接触から感情と言葉が立ち上がる。

外的事物は、内面を表すための単なる記号ではない。外的事物との関係が、それ以前には存在しなかった感情、方向および言葉を生成する。

この意味において古典詩学の興は、自己以外との接触によって自己と言語が生成するという生成学の基本構造と深く共鳴する。ただし、両者を歴史的に同一の理論と見なすべきではない。本論文が行うのは、影響関係の主張ではなく構造比較である。

2.3　座興から即興へ

「座興」という語が示すように、興は座の関係から生じうる。人が集まっただけでは座は成立しない。参加者が何らかの型、順序、役割および応答可能性を共有するとき、集合は座となる。

連歌では、前句が後続する句を一義的に決定しない。前句は制約であると同時に、まだ存在しない次句を引き起こす契機である。後続する者は、前句を説明するのではなく、その余白、響き、匂い、位および場の気配を受け取り、新しい接続を興す。

したがって、興は個人の所有物ではない。興は座の関係から立ち上がる。

第3章　生成学における即、座、興

3.1　即

生成学における即は、二項の同一性を意味しない。「生活即芸術」は、生活と芸術が最初から同一であるという意味ではない。生活が身体、自然、他者、場所、時間および応答を接続するインターフェイスとして作動するとき、芸術的な存在生成が現実化することを意味する。

即とは、差異を消去せずに異質な位相を接続し、その差異を保持したまま新たな関係生成を可能にする接続構造である。したがって即は静的な同一性ではなく、位相変換が生起するための生成的インターフェイスである。

したがって、即は静的な同一性ではなく、生成を作動させる接触である。

3.2　座

座とは、異質な存在者が型を介して関係し、現在の占有者に還元されない複数の位を生成し、応答と継承可能性を未来へ保持する構造化された空位である。

座は単なる場所ではない。場所、身体、物質、規則、参与、役割、時間および記憶が、生成可能な関係として編成された位相である。

座は興を保証しない。しかし、興が一時的な刺激として消費されず、形、位、作品性および文化生成へ接続されるための構造を与える。

3.3　興

本論文は、興を次のように定義する。

興とは、身体化された型が即によって自己以外の現実へ接触したとき、その抵抗から生じた不一致によって、偶然性が方向を持つ力として立ち上がる局面である。

興は力そのものではない。力が発生し、方向を持ち、身体と座に感知可能になる局面である。

また、興は単なる興奮でもない。興奮は強い刺激や反応であっても、新しい関係を生み出さない場合がある。生成学における興は、既存の接続構造を変え、次の形と位を可能にする場合にのみ成立する。

3.4　即興の定義

以上を踏まえ、即興を次のように定義する。

即興とは、身体化された型が座において「即」という生成的接続構造を通じて現実へ接触し、その抵抗から生じた偶然性が興として立ち上がり、形と位として一時的に納まりながら、主体、型および座を再帰的に変形する出来事である。

第4章　型と即興

4.1　型は規則ではない

生成学における型とは、同一の結果を複製する規則ではない。型とは、生成を反復可能にする存在論的構成である。

規則は、許される行為と許されない行為を区別する。型は、身体、素材、場所および他者がどのように接触しうるかを構成する。したがって型は制約であるが、その制約は結果を一義的に決定しない。

即興は型の外部で生じるのではない。型が現実からの予期しない応答を受け取り、自らの接続可能性を拡張するときに生じる。

4.2　身体化された型

型は言語的知識だけとして保持されるのではない。反復された運動、呼吸、リズム、距離感、視線、手触り、姿勢および判断として身体化される。

身体化された型は、毎回の判断を意識的な計算から解放する。しかしそれは機械的自動化ではない。身体化によって注意が、より微細な差異へ開かれる。

熟練した即興者は、何も考えていないのではない。型が身体化されているため、意識的な計算では捉えられない現実の変化へ応答できる。

4.3　型の自己超越

即興において型は破壊されるのではない。型の内部に潜在していた別の接続可能性が、現実との接触によって顕在化する。

したがって、即興における新しさは、過去との断絶から生じるのではない。過去の型が現在の抵抗を受け、それまでとは異なる未来へ接続されることから生じる。

即興とは、型が自らを反復しながら、自らの反復の仕方を変えることである。

第5章　即興の生成過程

即興の局所的な生成過程は、次の六つの局面として記述できる。

第一に、型と座が生成条件を準備する。

第二に、身体が即によって他者、素材、自然または制度へ接触する。

第三に、予測と現実の間に抵抗、遅延、ずれまたは失敗が生じる。

第四に、その不一致から、それまで存在しなかった接続可能性が偶然性として開かれる。

第五に、その偶然性が方向を持つ力として立ち上がる。この局面が興である。

第六に、興は音、言葉、線、動作、判断または配置として形になり、座の内部に新しい位として一時的に納まる。

この納まりは完成ではない。形と位は他者からの応答を受け、次の即を発生させる。そのため即興は循環する。ただし同じ地点へ戻るのではない。各応答によって主体、型および座が変化するため、その循環は再帰的であり、非対称的であり、不可逆的である。

第6章　時間、未来、力

6.1　即興は現在だけに属さない

即興は「今この瞬間」の芸術と呼ばれる。しかし、その現在には過去と未来が折り畳まれている。

過去は、型、記憶、技術および身体習慣として現在に保持される。未来は、予期、言葉、方向、次の音、次の句、次の動作およびまだ存在しない形として現在へ作用する。

即興の現在とは、過去を持たない瞬間ではない。身体化された過去が、未確定な未来へ向けて現実と接触する時間的密度である。

6.2　言葉と未来

『力の生成論』では、言葉は無としての未来に方向を与え、その方向が意味となり、意味が身体的態度と行為を組織すると論じられた。

即興においても、言葉、音、映像または身体的予期は、次に何が起こりうるかという未来の方向を現在へ導入する。しかし現実は、その方向どおりにはならない。その不一致が偶然性を生成する。

即興者は、未来を予測して正確に実現する者ではない。未来へ方向を与えながら、その方向が現実によって変形されることを受け入れる者である。

6.3　興と力

力は、主体が内部に所有する能力やエネルギーではない。異質な位相のあいだに成立した接続構造が、現実の位相変換として現象する生成的運動である。

興は、この力が関係のなかから立ち上がり、次の行為を可能にする局面である。

したがって、力は生成を方向づける関係的運動であり、興はその運動が起動し、感知され、共有可能になる出来事である。

第7章　人間以前性、自己以前性、自己証明

即興において応答する身体は、社会的に完成した自己の所有物ではない。

重力、呼吸、疲労、速度、季節、成長、腐敗、素材および環境は、人間という概念に先行しながら、現在も人間を生成し続ける。これが人間以前性である。

感覚、方向、身振り、判断、好みおよび創造可能性は、社会的自己像へ固定される以前から作動している。これが自己以前性である。

即興では、自己以前性が自己から直接表現されるのではない。自己以前性は、自己以外からの応答を受けることによって、はじめて自己に現れる。演奏後、描線の後、転倒の後、樹木の反応の後に、即興者は自分が何へ向かっていたかを知る。

この事後的な現れが自己証明である。即興は、すでに存在する自己を表現するのではなく、応答した自己が誰であったかを生成する。

第8章　現象学、中動態、非共現性

即興の経験は、現象学的には「自分が行為していると同時に、行為によって自分が生成されている経験」として記述できる。

その行為構造は、中動態的である。即興者は完全な能動的原因ではないが、受動的に動かされるだけでもない。行為は、身体、他者、素材、場所および時間を含む関係領域の内部で、即興者を巻き込みながら生起する。

「興る」と「興す」の両義性は、この中動態的構造を示している。即興者は興を興すが、興は即興者の意図を越えて興る。

さらに、興の生成条件は、結果となる形と同時には完全に現れない。過去の訓練、他者の微細な応答、素材の抵抗、場所の記憶および未来への予期は、一つの対象として共現しない。それらは結果となった形の内部に痕跡としてのみ現れる。

即興の現象は現象学によって記述され、その行為構造は中動態によって説明され、生成条件の不完全な現前は非共現性によって示される。

第9章　座、作品性、無名性

9.1　対話としての即興

即興は一人で行われる場合にも完全な独白ではない。即興者は素材、記憶、過去の作品、想定された他者、自然または制度へ応答している。

連歌では、作者と読者、発信者と応答者の位が交替する。音楽的即興では、一人の音が他者の聴取と応答によって意味を変える。Bensonが音楽的即興を対話として論じたことは、この関係構造と対応する。

即興の単位は、孤立した行為ではない。応答を含む関係である。

9.2　作品性

作品性とは、完成した作品が所有する性質ではない。ある形が、制作時点を越えて新たな応答と関係を生成し続ける能力である。

即興的な行為は、その場で消える場合でも、参加者の身体、記憶、型、記録または後続する実践を変形することがある。このとき即興は、固定物として残らなくても作品性を持つ。

9.3　無名性

即興の生成主体は、一人の作者に還元できない。型、他者、素材、場所、時間および歴史が、その生成に参与する。

この分有された生成主体が無名性である。無名性は作者名の消去ではなく、生成の起源を作者だけに閉じない存在様式である。

ただし無名性を、歴史的な作者、共同体または文化的起源を消去する口実として用いてはならない。George E. Lewisは、即興音楽をめぐる言説が人種的、文化的、政治的な歴史から切り離せないことを示した（Lewis 1996）。

無名性は責任と帰属の放棄ではない。適切な帰属を保持しながら、生成が個人を越えていることを認める概念である。

第10章　芸術実践における即興

10.1　グラフィティ

グラフィティでは、書き手が事前に持つ型と、壁面、塗料、身体の速度、都市の規則、通行者、天候および消去可能性が接触する。

描線は、頭のなかの完成像を単純に再現したものではない。壁面の粗さ、塗料の流れ、身体の距離および時間制限によって変形される。その変形から興が生じ、予測されていなかった形が現れる。

タグは署名であるが、その生成主体は個人だけではない。都市全体が即興の座に参与する。

10.2　スケートボーディング

スケートボーディングにおける即興は、身体と都市空間の関係変換として現れる。

階段、縁石、傾斜、手すり、路面の亀裂は、通常の都市設計では特定の機能を持つ。しかしスケーターの身体、ボード、速度および重力が接触すると、それらは別の接続可能性を持つ場所として再生成される。

技は型である。しかし技の実行は、路面、速度、恐怖、失敗および偶然によって毎回異なる。即興とは、都市の既定された必然性の内部に、新しい身体的使用可能性を興すことである。

10.3　盆栽

盆栽では、制作者の意図と樹木の成長は一致しない。剪定、針金、水、鉢、土、季節および時間に対して、樹木は遅延を伴って応答する。

したがって盆栽は、一瞬の即興ではなく、長い時間幅を持つ即興である。即座性は時間の短さではなく、現在の行為が樹木の現実的応答から離脱できないことにある。

10.4　Web Installation

Web Installationでは、作品は画面上の情報だけではない。URL、ドメイン、QRコード、検索、端末、身体移動、物理的場所、通信環境および鑑賞者の行為が、一つの分散した座を形成する。

利用者のアクセスは、既成作品の受容ではない。アクセスによって作品の位相がその都度生成される。通信遅延、リンク切れ、場所の差異および解釈のずれも、作品を変形する契機となる。

10.5　民宿狭山美学校

民宿狭山美学校は、完成された建築作品ではなく、生活、宿泊、制作、会話、道具、自然、訪問者および時間が応答し続ける長期的インスタレーションである。

そこでの即興は特別な上演に限定されない。食事、掃除、修繕、制作、滞在および出会いが、生活の座を絶えず更新する。

これは「生活即芸術」が、生活を芸術化する理念ではなく、生活そのものを存在生成のインターフェイスとして実践することであることを示す。

第11章　逆問題芸術と即興

順問題的な制作では、課題、方法および期待される結果が先に設定される。制作は、その条件から正しい結果を導く過程となる。

逆問題芸術では、断片的な結果、痕跡、違和感または予期しない出来事が先に現れ、そこから隠れていた問題、関係および可能世界が再構成される。

即興は逆問題芸術の実践的形式である。即興者は、最初から完成した問題と回答を持たない。現実から返された音、線、失敗、抵抗またはずれを手掛かりとして、「何がここで生成しようとしていたのか」を遡及的に発見する。

したがって芸術家は、興の内容を事前に決定しない。芸術家が設計するのは、結果を先取りできない接触、すなわち非可解性を保持するインターフェイスである。

第12章　人工知能と即興

12.1　新奇性と興の違い

生成AIは、既存の言語、画像または音響データから、統計的に新しい組み合わせを高速に生成できる。しかし出力が以前の出力と異なることだけでは、生成学上の興は成立しない。

新奇性は、出力間の差異である。偶然性は、それまで存在しなかった接続可能性の生成である。興は、その偶然性が身体、現実および座を変形する力として立ち上がることである。

したがって、計算上予測困難な出力と、存在論的な即興は区別されなければならない。

12.2　デリバティブ空間

『言語デリバティブ論』では、AIのハルシネーションは、言語的生成が現実接地の条件から切断された状態として再定義された。

AIの出力が言語的整合性だけによって評価される場合、記号は他の記号から派生し、記号によって承認される。そこでは興奮や驚きが生じても、身体、社会的実践、責任および現実的変形へ接続されない可能性がある。

この状態は興ではなく、現実接地を欠いた記号的刺激である。

12.3　AIが即興へ参加する条件

AIは即興の主体を全面的に代替できないが、即興の座に参与するインターフェイスにはなりうる。

そのためには、次の条件が必要である。

第一に、AIの出力が人間の身体的知覚と実践へ接続されること。

第二に、出力が事実、素材、他者および制度からの抵抗を受けること。

第三に、AIの出力によって誰が判断し、誰が行為し、誰が結果を負うかが明確であること。

第四に、出力が座の型と位をどのように変形したかを再検討できること。

第五に、AIによる予測不可能性を、それ自体で創造性と同一視しないこと。

AIは可能性を外部化できる。しかし、その可能性を身体化し、現実へ接続し、結果を引き受ける過程は、人間、共同体および制度を含む座の責任である。

第13章　即興の倫理と政治

即興は、それ自体で自由、平等または民主性を保証しない。誰が座へ参加できるか、誰が最初の音や言葉を発するか、誰の逸脱が創造として認められるか、誰が失敗の危険を負うかによって、即興の構造は変わる。

閉じた座では、一部の者だけが興を起こす権利を持ち、他者は既定の位に固定される。また、周縁的な共同体が生成した型や興が、文化的背景を消去されたまま中心的制度によって所有されることもある。

開かれた座では、型が保持されながら、参与者の応答によってその型と位が更新される。開放性とは規則の欠如ではなく、規則と位が批判、再配分および変形に開かれていることである。

即興の倫理は、自由に行為する倫理ではない。それは、接触によって生じた関係から離脱せず、他者と現実から返された応答に答える倫理である。

第14章　基本命題

第一命題
即興は、無準備な表現ではなく、身体化された型の現実応答である。

第二命題
即は、差異を消去せず、異質な位相を差異のまま生成的に接続する構造である。

第三命題
座は、型、位、参与および継承可能性を保持する構造化された空位である。

第四命題
興は、現実との不一致から生じた偶然性が、方向を持つ力として立ち上がる局面である。

第五命題
興は力そのものではなく、力が起動し、感知され、共有可能になる出来事である。

第六命題
即興は型の否定ではなく、型が現実との接触によって自己の接続可能性を越えることである。

第七命題
即興の現在には、身体化された過去と未確定な未来が折り畳まれている。

第八命題
即興者は行為の唯一の原因ではなく、行為によって生成される中動態的参与者である。

第九命題
即興の主体は、身体、他者、素材、場所、制度および時間へ分有される。

第十命題
無名性は作者の消去ではなく、生成主体が個人を越えて分有される存在様式である。

第十一命題
作品性とは、即興的な形がその場を越えて新たな関係を生成し続ける能力である。

第十二命題
芸術家は興そのものを製造するのではなく、興が生じうる座とインターフェイスを設計する。

第十三命題
人工知能による新奇な出力は、現実接地を獲得したときにのみ生成的即興へ参与できる。

第十四命題
即興の倫理的条件は、身体性、応答可能性、帰属および結果責任である。

結論

本論文は、即興を無規則な自発性または瞬間的な思いつきとしてではなく、型、座、即、現実、抵抗、偶然性、興、形、位および納まりからなる存在生成として再構成した。

即は、身体と自己以外を接触させる。座は、その接触を受け止め、持続可能にする。現実は、身体の予測に抵抗する。その不一致から、それまで存在しなかった接続可能性が偶然性として生じる。その偶然性が方向を持つ力として立ち上がる局面が興である。興は形として現れ、位として一時的に納まる。しかし、その納まりは次の応答によって再び開かれる。

したがって即興とは、型を持たない自由ではない。型が自己以外との接触を通じて、まだ知られていない自己、形および未来を生成することである。

興は自己の内部から出現するのではない。自己と自己以外のあいだから興る。ゆえに即興者は、興の所有者ではなく、その発生に参与する者である。

芸術家が制作できるのは、興そのものではない。芸術家が制作できるのは、異質な存在者が接触し、現実からの抵抗を受け、偶然性が力として立ち上がりうる座である。

この意味において、即興は特殊な芸術技法ではない。それは、存在が自己の既定性を越えて生成するための根源的な様式である。

参考文献

Alperson, Philip. 1984. “On Musical Improvisation.” The Journal of Aesthetics and Art Criticism 43, no. 1: 17-29.

Benson, Bruce Ellis. 2003. The Improvisation of Musical Dialogue: A Phenomenology of Music. Cambridge: Cambridge University Press.

Dewey, John. 1934. Art as Experience. New York: Minton, Balch.

Lewis, George E. 1996. “Improvised Music after 1950: Afrological and Eurological Perspectives.” Black Music Research Journal 16, no. 1: 91-122.

Ogata, Tsutomu. 1997. Za no Bungaku: Renshushin to Haikai no Seiritsu. Tokyo: Kodansha.

Peters, Gary. 2009. The Philosophy of Improvisation. Chicago: University of Chicago Press.

Sawyer, R. Keith. 2000. “Improvisation and the Creative Process: Dewey, Collingwood, and the Aesthetics of Spontaneity.” The Journal of Aesthetics and Art Criticism 58, no. 2: 149-161.

Suchman, Lucy A. 2007. Human-Machine Reconfigurations: Plans and Situated Actions. Cambridge: Cambridge University Press.

Varela, Francisco J., Evan Thompson, and Eleanor Rosch. 1991. The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience. Cambridge, MA: MIT Press.

Zhu Xi. Shijing Jizhu. Classical Chinese text.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026a. Axioms of Generative Topological Ontology: A Foundational Theory of Existential Generation. Research Monograph Series, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026b. The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026c. Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026d. The Theory of Language Derivatives: Inverse

Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination. Research Monograph Series, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026e. The Ontology of Kata: Mark, Namelessness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026f. The Ontology of Namelessness: Workhood, Sacredness, and Cultural Generation. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026g. The Ontology of Life as Art. Research Monograph Series, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026h. A Generative Theory of Force: Topological Transformation from Necessity to Contingency in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026i. The Generative Ontology of Za: Structured Vacancy, Kata, Position, and Namelessness in Generative Studies. Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026j. The Generative Ontology of Sokuza: Situated Actualization, Reality Grounding, and the Generation of Position. Research Memorandum, Version 1.0.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。